

研究主題

第12回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究

目次

第1 調査研究の概要

1 調査研究の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194

2 調査研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194

3 調査研究の内容及び方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194

第2 調査結果

1 平成25年度東京都公立幼稚園5歳児の運動能力調査結果一覧・・・・・・・・ 195

2 運動能力調査結果における有意差検定の結果・・・・・・・・ 195

第3 調査結果の分析

1 種目別調査の結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196

2 補助調査の結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205

第4 調査研究のまとめと今後の課題

1 調査研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 208

2 幼児が楽しみながら体を動かす遊びの充実に向けた指導・環境の工夫・・・・ 209

3 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209

○ 種目別調査結果の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 210

○ 参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213

＜研究の成果と活用＞

1 研究の成果

- (1) 東京都公立幼稚園に在籍する5歳児約2,000人を対象とした運動能力調査を実施し、過去の調査結果と比較分析することで、幼児の運動能力の傾向を明らかにした。
- (2) 幼児が楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる「動き」を30の要素に分類し、調査・分析した。
- (3) 調査実施園59園に運動能力調査と併せて補助調査を実施し、幼児が楽しんで体を動かしている遊びや健康・体力づくりに関わる指導・援助等の状況、様々な動きを取り入れるための工夫を示した。

2 研究成果の活用

- (1) 各幼稚園における、遊びや健康・体力づくりに関わる指導や援助等の工夫・改善への活用
- (2) 幼稚園教育の充実を図るための研究・研修への活用

## 第1 調査研究の概要

### 1 調査研究の経緯

昭和50年代前半、都市化の影響から運動能力の発達が十分でなかったり、遊びに意欲的に取り組めなかったりする幼児の増加が問題視されるようになった。東京都教育委員会では幼稚園教育を推進する上で、幼児の運動能力の実態を捉えることが重要であると考え、昭和55年度から3年ごとに東京都公立幼稚園に在園する5歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。また、平成13年度からは小学校教育との接続や連携の観点も含めて調査を行っている。

近年、幼児の育ちについては、基本的な生活習慣の欠如、自制心や耐性の不足、食生活の乱れ、運動能力の低下、小学校生活にうまく適応できない等の課題が指摘されており、国は子供を取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の充実に向けた総合的な施策を進めている。東京都教育委員会においても、平成21年度に「就学前教育プログラム」を開発し、就学前教育と小学校教育との接続期に焦点を当て、保育所や幼稚園等に在籍する幼児の小学校生活への適応を図ることを目指している。また「東京都教育ビジョン（第3次）」の主要施策「体力向上を図る取組の推進」に基づき、「総合的な子供の基礎体力向上方策」を進め、学校体育の充実や体力向上のための体制整備等について具体的な取組を推進するとともに、社会全体で東京都の子供たち一人一人の基礎体力の向上を図っている。

### 2 調査研究の目的

本調査研究は、過去11回の調査結果と比較して幼児の運動能力の傾向を明らかにするとともに、調査実施園に対して運動能力に関する補助調査を実施し、幼児が楽しんで体を動かしている遊びや健康・体力づくりに関わる指導・援助の工夫等について調査することにより、幼稚園教育の充実に資する資料の提供を行うことが目的である。

### 3 調査研究の内容及び方法

#### (1) 対象園

過去の調査で、継続的に調査を実施している園及び、これまで調査を行っていない区市から、新規に各2園程度。総数59園。

#### (2) 対象幼児〔平成25年5月1日現在 平成25年度学校基本調査速報から〕

都内全公立幼稚園等のうち調査協力園59園に在籍する5歳児2,030人  
(都内全公立幼稚園等189園に在籍する5歳児6,139人の33.1%)

#### (3) 運動能力調査期間

平成25年10月から11月までの2か月の間の連続する2週間で実施した。

#### (4) 運動能力調査等の内容及び方法

##### ア 運動能力調査

##### (7) 25m走(主として敏捷性、瞬発力)

30mの直走路を走り、スタートから25mの地点を通過したときの時間を測定する。

##### (4) 立ち幅跳び(主として瞬発力)

両足同時に踏み切って跳び、踏み切り線と着地した地点との最短距離を測定する。

##### (ウ) ソフトボール投げ(主として瞬発力、調整力)

助走を行わずにボールを投げ、投球するラインと落下地点の距離を測定する。

(I) 体支持持続時間(主として筋力、持久力)

二つの巧技台の間に立ち、両腕で体を浮かし、体を支えられる時間を測定する。

(オ) 両足連続跳び越し(主として調整力、敏捷性)

4 m 50 cmの間に置かれた10個の積み木を両足で同時に跳ぶ時間を測定する。

※各種目には、その数値に応じて段階を表す級を設定し、継続的に度数分布による比較をしている。

※測定方法の詳細は、213ページの参考資料に掲載。

イ 運動能力に関する補助調査

幼児が楽しんで体を動かしている遊びや、その中に含まれる動き、幼稚園が行っている指導・援助の工夫等に関する補助調査を実施した。

第2 調査結果

1 平成25年度東京都公立幼稚園5歳児の運動能力調査結果一覧

5種目について、調査をした結果は以下のとおりである。

表1

年齢	性別	種目 人数	25m走(秒)		立ち幅跳び(cm)		ソフトボール投げ(m)		体支持持続時間(秒)		両足連続跳び越し(秒)	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年齢区分A	男児	435	6.4	0.7	101.9	21.8	5.6	2.7	44.9	34.6	5.6	1.6
	女児	375	6.5	0.8	95.9	18.8	4.1	1.6	46.3	38.0	5.6	1.3
	合計	810	6.5	0.7	99.1	20.6	4.9	2.4	45.5	36.2	5.6	1.5
年齢区分B	男児	652	6.2	0.7	106.2	21.6	6.1	2.5	50.8	40.5	5.4	1.4
	女児	568	6.3	0.6	99.5	20.9	4.5	1.5	52.3	38.4	5.5	1.3
	合計	1220	6.3	0.6	103.1	21.5	5.4	2.2	51.5	39.5	5.4	1.4
全体	男児	1087	6.3	0.7	104.5	21.8	5.9	2.6	48.4	38.3	5.5	1.5
	女児	943	6.4	0.7	98.1	20.2	4.3	1.6	49.9	38.4	5.5	1.3
	合計	2030	6.4	0.7	101.5	21.3	5.2	2.3	49.1	38.3	5.5	1.4

※年齢区分A…～5歳11か月

年齢区分B…6歳0か月～

《標準偏差》

資料の各値とその平均値との隔たりを表す量を偏差といい、偏差の平方の平均を分散という。さらに、分散の平方根を標準偏差という。標準偏差は平均の周りにおける資料の散らばりの度合いを数量的に表す量であり、標準偏差の値が大きいほど、資料の散らばりの度合いが大きい。

2 運動能力調査結果における有意差検定の結果

5種目について、男女間及び年齢区分間の有意差検定を行った結果は以下のとおりである。

表2

比較した項目	種目	25m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ	体支持持続時間	両足連続跳び越し
男児・女児間		○	○	○	×	×
年齢区分Aの男女間		○	○	○	×	×
年齢区分Bの男女間		○	○	○	×	×
男児の年齢区分AB間		○	○	○	○	○
女児の年齢区分AB間		○	○	○	○	×

(有意水準5%で ○有意差あり ×有意差無し)

《有意差検定》

この調査研究では、サンプル数、平均値、平均値の標準偏差から有意差検定を行っている。  
有意差検定の結果は、比較をした数値間に偶然とはいええない差があるかどうかを示している。  
「有意水準5%で有意差あり」とは、95%の確率で偶然とは考えにくい差があるということである。

有意差検定の結果、「25m走」と「立ち幅跳び」、「ソフトボール投げ」では性差・年齢差ともに有意差が認められたが、「体支持持続時間」は男女間において、「両足連続跳び越し」は男児年齢区分A B間以外について、有意差が認められなかった。

第3 調査結果の分析

1 種目別調査の結果と分析

(1) 25m走

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは平均値が男児は6.4秒、女児は6.5秒である。年齢区分Bでは平均値が男児は6.2秒、女児が6.3秒である。全体の平均では男児が6.3秒、女児が6.4秒である（表3）。



表3

年度	性別	年齢区分A(～5歳11か月)						年齢区分B(6歳0か月～)						全 体			
		サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数
平成25年度	男 児	422	6.4	0.7	11.0	4.7	12.5	630	6.2	0.7	10.5	4.9	12.5	1052	6.3	0.7	10.8
	女 児	362	6.5	0.8	11.5	5.3	15.8	546	6.3	0.6	9.9	5.0	13.4	908	6.4	0.7	10.7

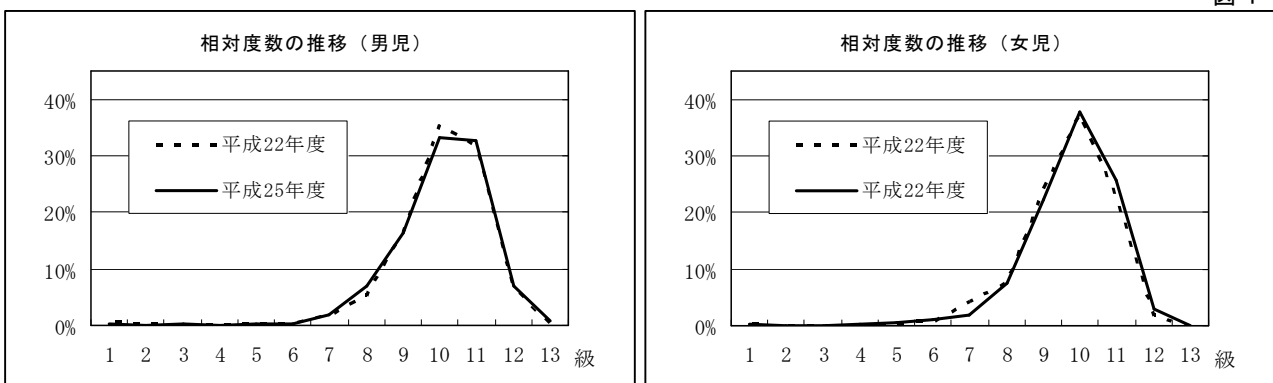
《変動係数》

変動係数は平均値に対する標準偏差の割合を表すもので、相対的な散らばりを表す指標である。標準偏差は測定単位の影響を受けるので単位の異なる資料の比較ができないが、変動係数は単位が異なる資料の散らばりの度合いを相互に比較できる。この値が大きいほど平均の周りにおける資料の散らばりの度合いが大きい。

＜度数の分布＞

男児、女児とも平成22年度調査の度数の分布とほぼ同じ形状を示している。また、男児は10級と11級の割合が減少している。女児は7級の割合が減少している（図1）。

図1

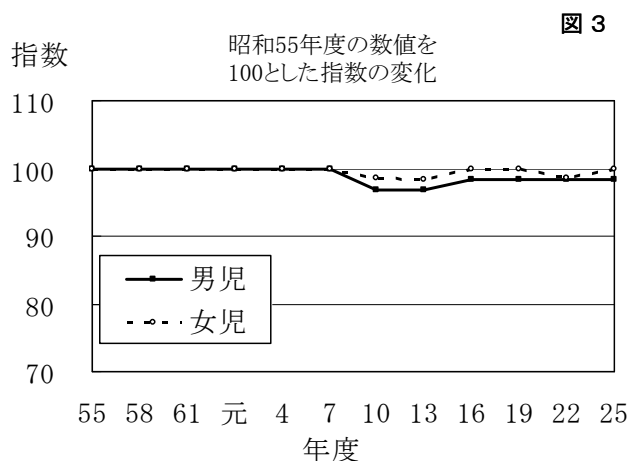
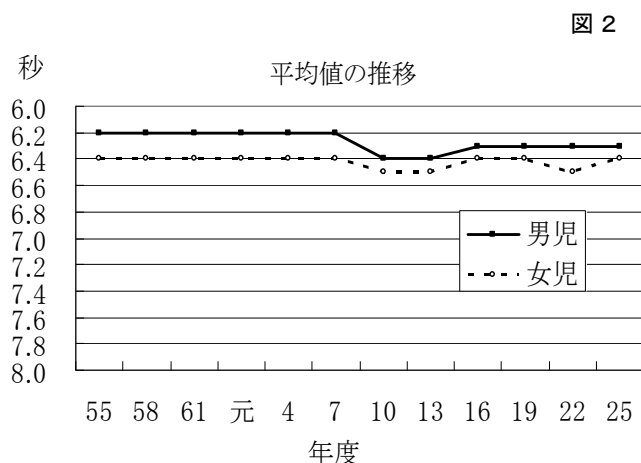


1級 10.6～	2級 10.1～10.5 (代表値 10.3)	3級 9.6～ 10.0 (代表値 9.8)
4級 9.1～ 9.5 (代表値 9.3)	5級 8.6～ 9.0 (代表値 8.8)	6級 8.1～ 8.5 (代表値 8.3)
7級 7.6～ 8.0 (代表値 7.8)	8級 7.1～ 7.5 (代表値 7.3)	9級 6.6～ 7.0 (代表値 6.8)
10級 6.1～ 6.5 (代表値 6.3)	11級 5.6～ 6.0 (代表値 5.8)	12級 5.1～ 5.5 (代表値 5.3)
13級 ~ 5.0		(単位：秒)

＜過去11回の調査との比較＞

平成10年度に、男児の平均値は6.4秒に、女児の平均値は6.5秒に下がったが、平成16年度に男児、女児ともに0.1秒速くなり、男児6.3秒、女児6.4秒となった。今回の調査では、男児は平成16年度から4回連続で6.3秒となり、女児は平成22年度調査から0.1秒速くなり、6.4秒となった(図2)。

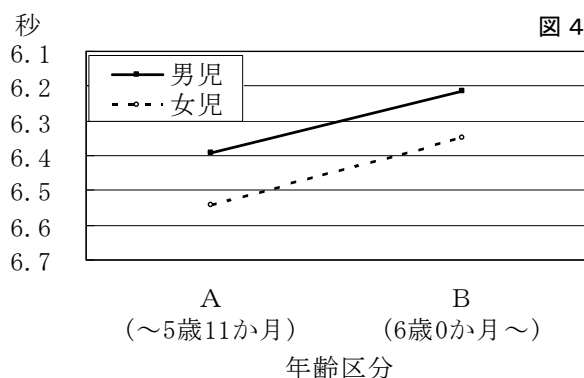
昭和55年度の結果を100とした指数変化(図3)では、昭和55年度から平成7年度まで男児・女児ともに変化はなかったが、平成10年度から男児・女児ともに低下した。平成16年度の調査で女児の指数は昭和55年度の値100に戻し、男児の指数も98.4に上昇した。今回の調査では、男子が98.4、女児が100である。男児・女児共に昭和55年度の第1回調査以降ほぼ横ばいの状態で、大きな変化は見られない。



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分AとBの差は、男女児ともに、約0.2秒になっている(図4)。

男児B区分の記録は平成22年度調査と同じ値で、男児A区分の数値は、平成22年度調査より約0.1秒速くなった。また、女児A区分及びB区分の記録は平成22年度調査より約0.1秒速くなった。



(2) 立ち幅跳び

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児は101.9cm、女児は95.9cmであり、年齢区分Bでは、平均値が男児は106.2cm、女児は99.5cmである。全体の平均は、男児が104.5cm、女児は98.1cmであ

る(表4)。

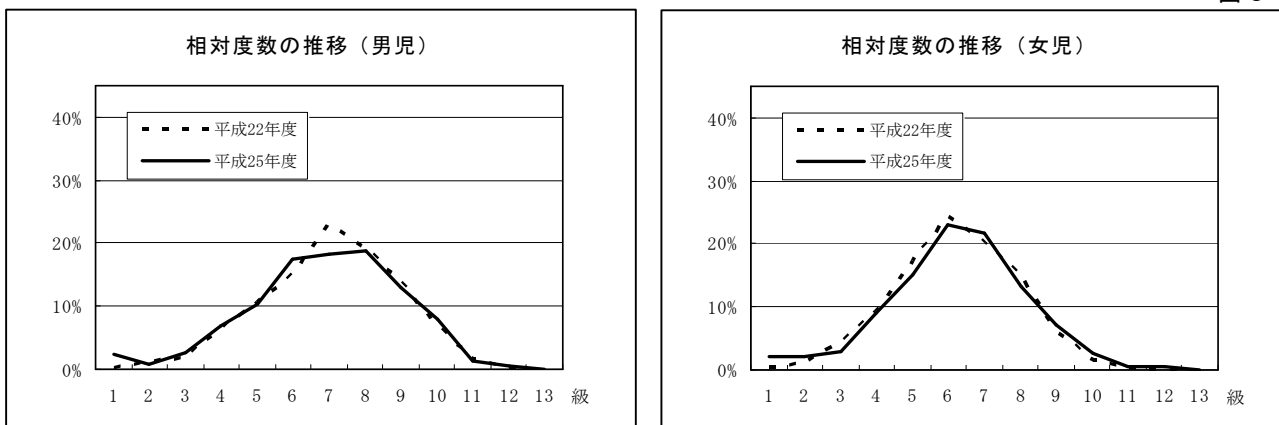
表4

年度	性別	年齢	年齢区分A(～5歳11か月)						年齢区分B(6歳0か月～)						全体			
			サンプル数	平均(cm)	標準偏差	変動係数	最高値(cm)	最低値(cm)	サンプル数	平均(cm)	標準偏差	変動係数	最高値(cm)	最低値(cm)	サンプル数	平均(cm)	標準偏差	変動係数
平成25年度	男児		419	101.9	21.8	21.3	152.0	19.0	627	106.2	21.6	20.4	172.0	19.0	1046	104.5	21.8	20.8
	女児		367	95.9	18.8	19.6	151.0	20.0	551	99.5	20.9	21.0	190.0	10.0	918	98.1	20.2	20.6

<度数の分布>

平成22年度調査の度数の分布と比較すると、男児は7級～9級、女児は4級～6級が減少した形状を示している。また、平成22年度調査と比較すると、男児は1級が増加し、女児は1、2級が増加している(図5)。

図5



1級	0～50 (代表値 25)	2級	51～60 (代表値 55)	3級	61～70 (代表値 65)
4級	71～80 (代表値 75)	5級	81～90 (代表値 85)	6級	91～100 (代表値 95)
7級	101～110 (代表値 105)	8級	111～120 (代表値 115)	9級	121～130 (代表値 125)
10級	131～140 (代表値 135)	11級	141～150 (代表値 145)	12級	151～160 (代表値 155)
13級	161～				

(単位: cm)

<過去11回の調査との比較>

平均値は、男児が平成元年度に最も高い値を示したが、その後は低下の傾向にある。女児は平成16年度の調査では一度上昇した後、低下傾向にあったが、今回の調査で上昇した(図6)。

昭和55年度の結果を100とした指数変化(図7)では、男児は93.1、女児は96.0となっており、平成16年度以降、男児・女児共には低下傾向にあったものの、今回の調査で女児は上昇傾向を示したことが分かる。

図6

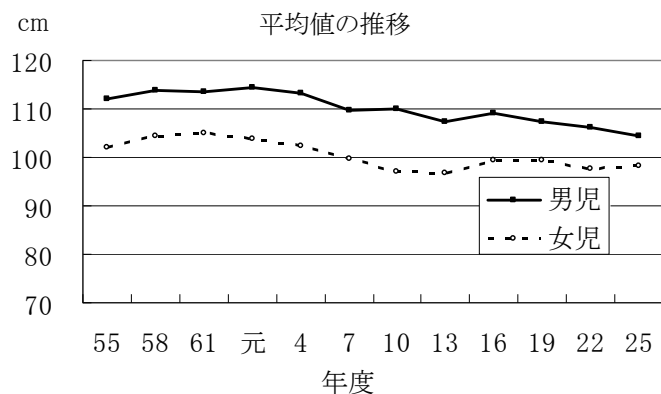
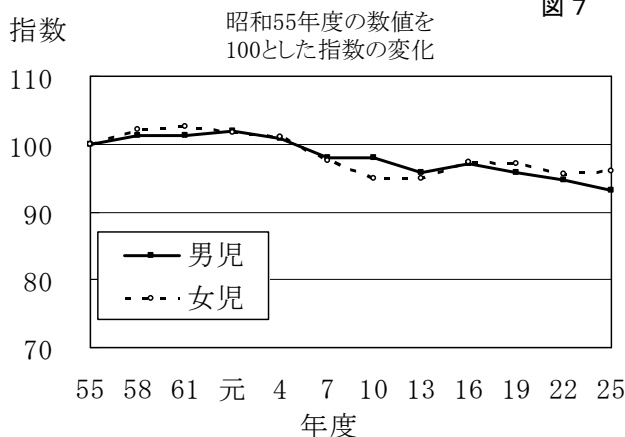


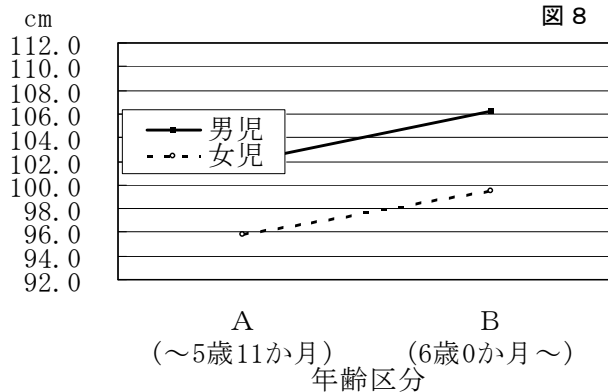
図7



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分A Bともに性差が見られる(図8)。

平成22年度調査と比較すると、男児はB区分に低下が見られる。女児はB区分では0.6cm程度低下が見られるが、A区分は2cm程度伸びている。



(3) ソフトボール投げ

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児は5.6m、女児は4.1mである。年齢区分Bでは、平均値が男児は6.1m、女児は4.5mである。全体の平均では、男児が5.9m、女児が4.3mである(表5)。



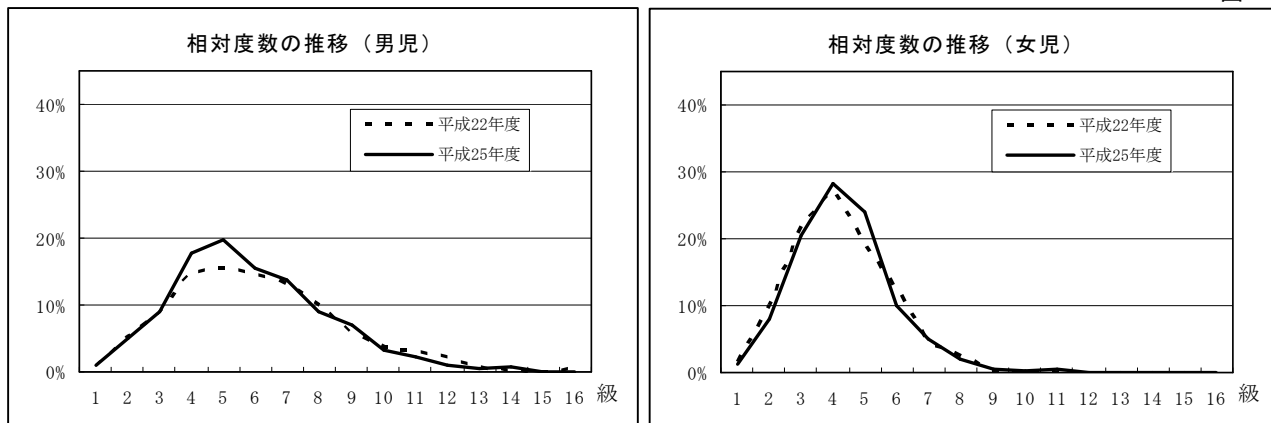
表5

年度	性別	年齢区分A (~5歳11か月)						年齢区分B (6歳0か月~)						全体			
		サンプル数	平均 (m)	標準偏差	変動係数	最高値 (m)	最低値 (m)	サンプル数	平均 (m)	標準偏差	変動係数	最高値 (m)	最低値 (m)	サンプル数	平均 (m)	標準偏差	変動係数
平成25年度	男児	426	5.6	2.7	48.3	36.0	1.0	628	6.1	2.5	40.7	14.0	1.0	1054	5.9	2.6	43.9
	女児	362	4.1	1.6	38.2	13.0	1.0	540	4.5	1.5	33.9	11.0	1.0	902	4.3	1.6	36.1

＜度数の分布＞

男児の度数分布は1級から14級までの広い範囲に分布しているが、女児は4級を中心に集中している。男児、女児ともに、平成22年度調査と大きな変化は見られない。この種目は、変動係数から個人差が大きい種目と言える(図9)。

図9



- 1級 0 ~ 1.0 (代表値 0.5)
- 2級 1.1 ~ 2.0 (代表値 1.5)
- 3級 2.1 ~ 3.0 (代表値 2.5)
- 4級 3.1 ~ 4.0 (代表値 3.5)
- 5級 4.1 ~ 5.0 (代表値 4.5)
- 6級 5.1 ~ 6.0 (代表値 5.5)

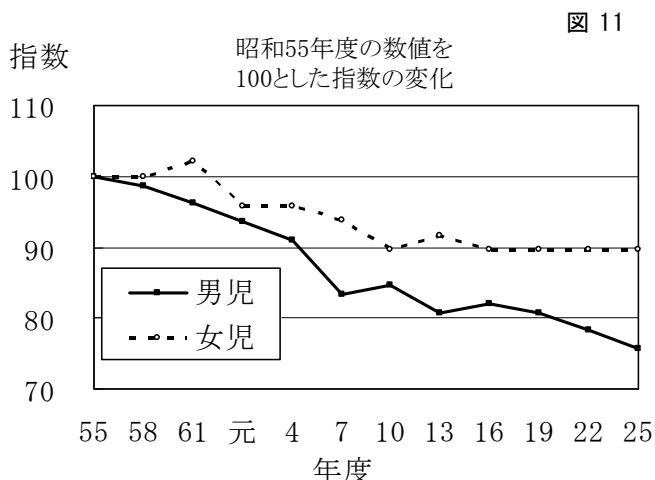
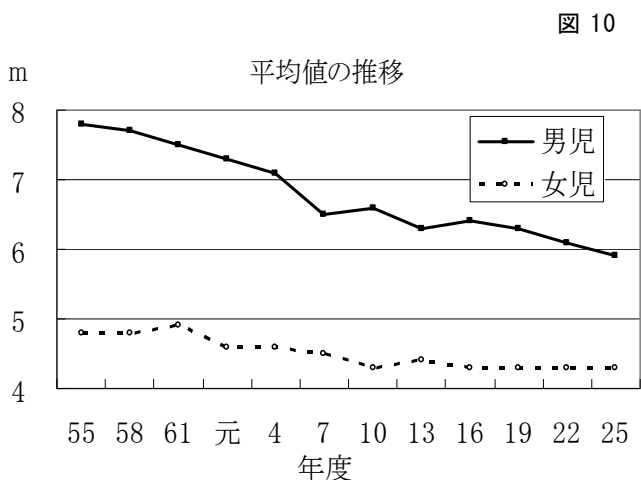
第12回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究

7級 6.1～7.0 (代表値 6.5) 8級 7.1～8.0 (代表値 7.5) 9級 8.1～9.0 (代表値 8.5)  
 10級 9.1～10.0 (代表値 9.5) 11級 10.1～11.0 (代表値10.5) 12級 11.1～12.0 (代表値11.5)  
 13級 12.1～13.0 (代表値12.5) 14級 13.1～14.0 (代表値13.5) 15級 14.1～15.0 (代表値14.5)  
 16級 15.1～ (単位：m)

<過去11回の調査との比較>

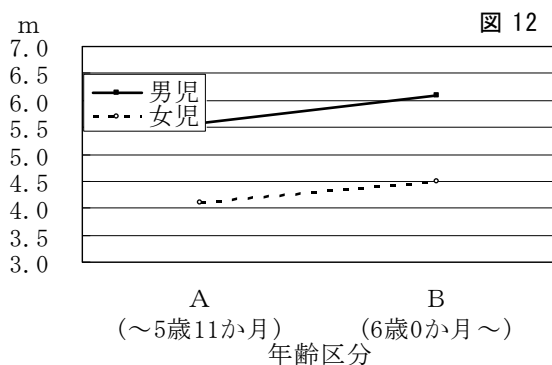
男児は平成7年度以降、多少の上下を繰り返しつつ下降している。今回調査でも緩やかに下降しており、前回から0.2m下回った。女児は平成16年度調査から変わらず、同じ値を維持している(図10)。

指数変化を見ると、この種目の下降率は、男児の方が大きいことが分かる(図11)。



<年齢区分間の運動能力の比較>

年齢区分AとBの値の差は、男児は0.5m、女児は0.4mで、これまでの調査の平均値等の推移から、平成22年度調査に比べて、年齢区分AとBの値の差が縮まったことが分かる。また、性差も大きく、この傾向は平成22年度調査と同じである(図12)。



(4) 体支持持続時間

<調査結果の概要>

年齢区分Aでは、平均値が男児は44.9秒、女児は46.3秒である。また、年齢区分Bでは平均値が男児は50.8秒、女児は52.3秒である。全体の平均では、男児が48.4秒、女児が49.9秒である(表6)。





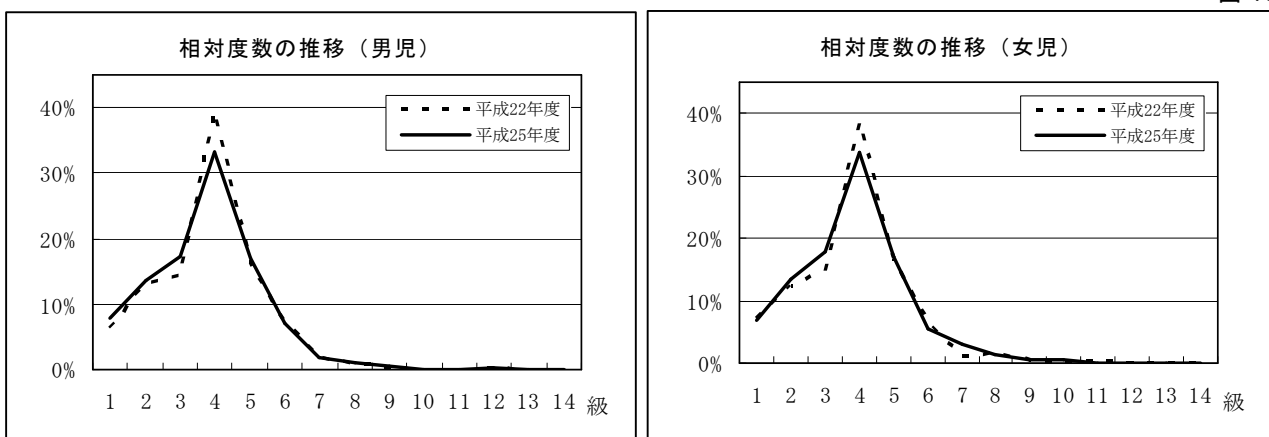
表 6

年度	年齢 項目 性別	年齢区分A(～5歳11か月)						年齢区分B(6歳0か月～)						全 体			
		サンプル 数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	サンプル 数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	サンプル 数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
平成 25 年度	男 児	415	44.9	34.6	77.1	295.0	2.0	622	50.8	40.5	79.7	330.0	1.0	1037	48.4	38.3	79.2
	女 児	365	46.3	38.0	82.3	316.0	0.0	539	52.3	38.4	73.5	250.0	0.0	904	49.9	38.4	76.9

<度数の分布>

男児・女児とも過去の度数分布と同じように4級に値が集中しており、性差も少ない。変動係数が大きく、この種目は個人差が大きいと言える(図13)。

図 13

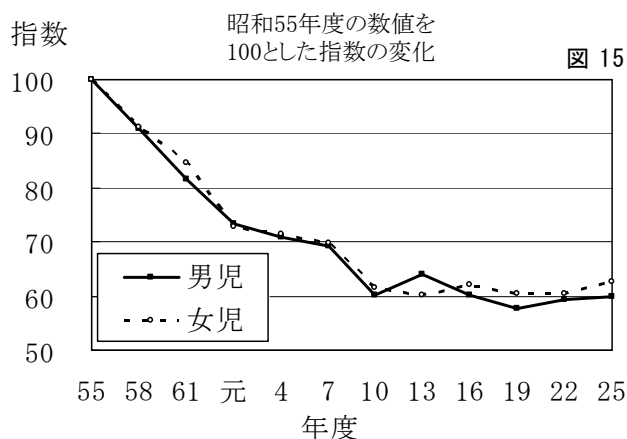
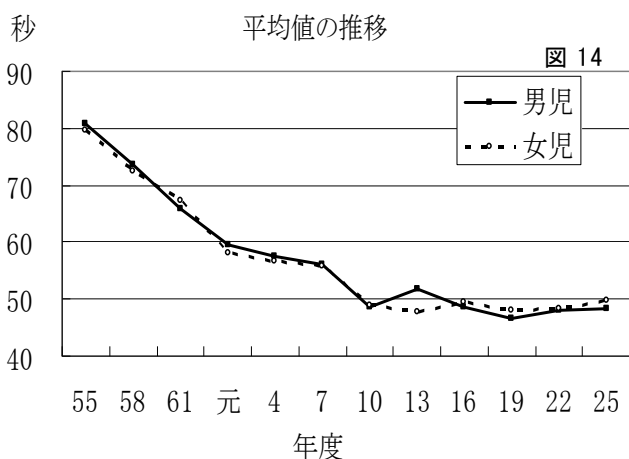


- 1級 0～ 10 (代表値 5)    2級 11～ 20 (代表値 15)    3級 21～ 30 (代表値 25)
  - 4級 31～ 60 (代表値 45)    5級 61～ 90 (代表値 75)    6級 91～120 (代表値 105)
  - 7級 121～150 (代表値 135)    8級 151～180 (代表値 165)    9級 181～210 (代表値 195)
  - 10級 211～240 (代表値 225)    11級 241～270 (代表値 255)    12級 271～300 (代表値 285)
  - 13級 301～330 (代表値 315)    14級 331～
- (単位：秒)

<過去11回の調査との比較>

平均値は、昭和55年度から平成10年度にかけて男児が32.2秒、女児が30.7秒低下した。男児は平成19年度に本調査における最低値となったが、今回調査では平成22年度調査より0.3秒上昇し、女児は1.7秒上昇した。全体的に見ると平成10年度からほぼ横ばいである(図14)。

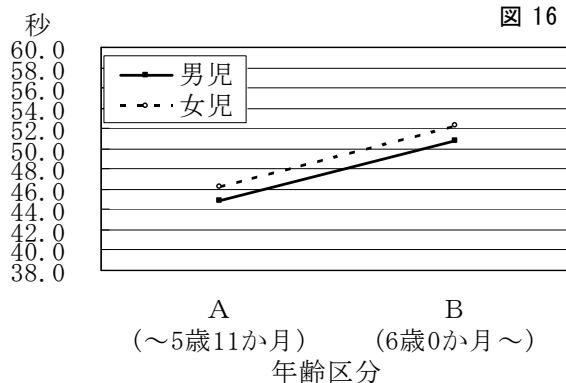
指数変化でも男児、女児とも平成10年度からほぼ横ばいである。この種目は性差が少ないため、指数変化を表したグラフも男女でほぼ同じ形状となっている(図15)。



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分AとBでは、男児・女児とも5秒程度の違いがある(図16)。

調査を開始した昭和55年度以来、この種目では、A B区分とも女児の数値が高い。また、年齢区分の性差が小さい。



(5) 両足連続跳び越し

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児・女児とも5.6秒である。また、年齢区分Bでは、平均値が男児は5.4秒、女児は5.5秒である。全体の平均では、男児・女児とも5.5秒である(表7)。



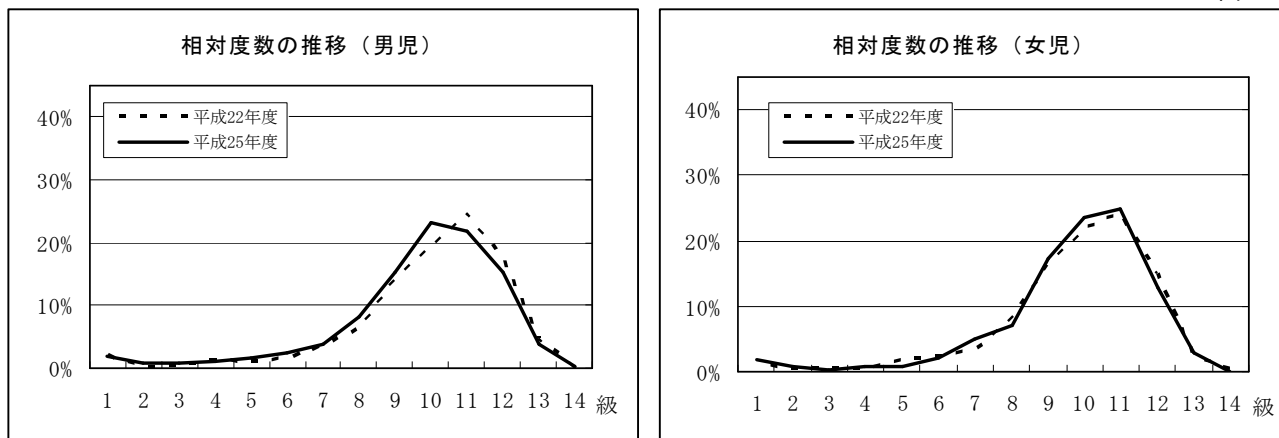
表7

年度	性別	項目	年齢区分A (~5歳11か月)						年齢区分B (6歳0か月~)						全体			
			サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数
平成25年度	男児		415	5.6	1.6	28.2	3.5	19.0	625	5.4	1.4	26.3	2.3	21.1	1040	5.5	1.5	27.2
	女児		355	5.6	1.3	23.2	3.2	14.3	535	5.5	1.3	24.1	3.6	16.6	890	5.5	1.3	23.7

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数分布と大きな変化は見られないが、男児は10級が増加し、11~12級は減少している。また、女児は7級が増加し、12級の割合が減少している(図17)。

図17



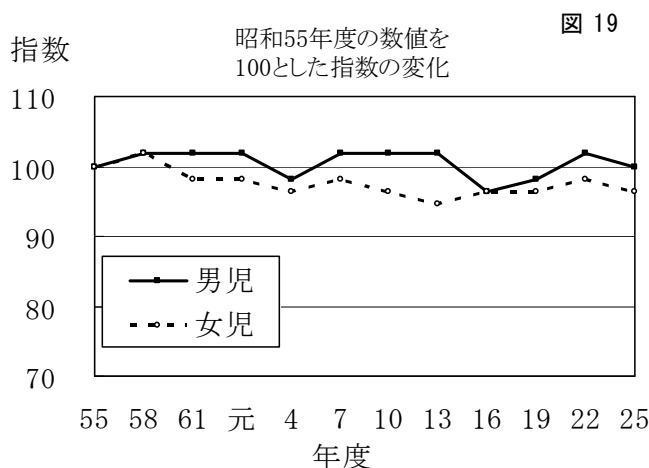
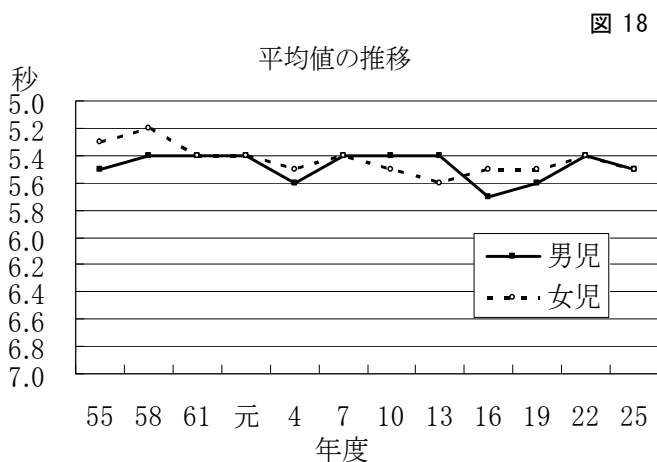
- 1級 9.6~
- 2級 9.1~9.5 (代表値 9.3)
- 3級 8.6~ 9.0 (代表値 8.8)
- 4級 8.1~8.5 (代表値 8.3)
- 5級 7.6~8.0 (代表値 7.8)
- 6級 7.1~ 7.5 (代表値 7.3)
- 7級 6.6~7.0 (代表値 6.8)
- 8級 6.1~6.5 (代表値 6.3)
- 9級 5.6~ 6.0 (代表値 5.8)

10級 5.1～5.5 (代表値 5.3) 11級 4.6～5.0 (代表値 4.8) 12級 4.1～ 4.5 (代表値 4.3)  
 13級 3.6～4.0 (代表値 3.8) 14級 ～3.5 (単位：秒)

＜過去11回の調査との比較＞

平均値は、男児は平成16年度の調査で平成13年度の値5.4秒から5.7秒となったが、平成19年度と平成22年度の調査では、2回連続で速くなっていた。しかし、今回の調査では平成22年度より0.1秒遅くなっており、調査を開始した昭和55年度と同じ値になった。女児に関しては、平成22年度調査よりも0.1秒程度遅くなった(図18)。

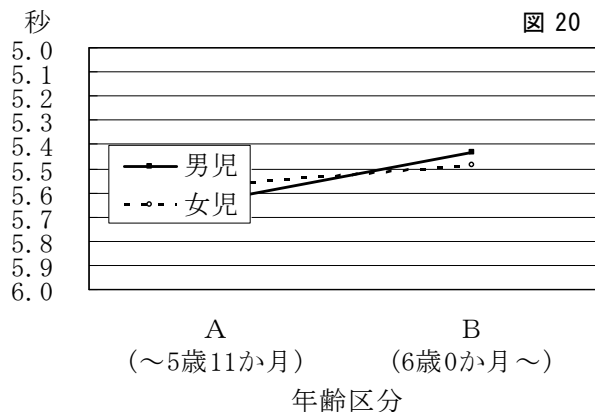
また、昭和55年度の結果を100とした指数変化からは、ほぼ横ばいで推移している状況が分かる。これまでの調査でも明確な傾向が出ていない種目でもあるため、運動能力が低下しているか向上しているかは、今後の調査結果を確認する必要がある(図19)。



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分AとBの差は、男女児ともに0.2秒となっている(図20)。

また、年齢区分による差は少なく、性別による違いもほとんどない種目である。



(6) 身長及び体重

ア 身長

(7) 平成25年度 調査結果

＜調査結果の概要＞

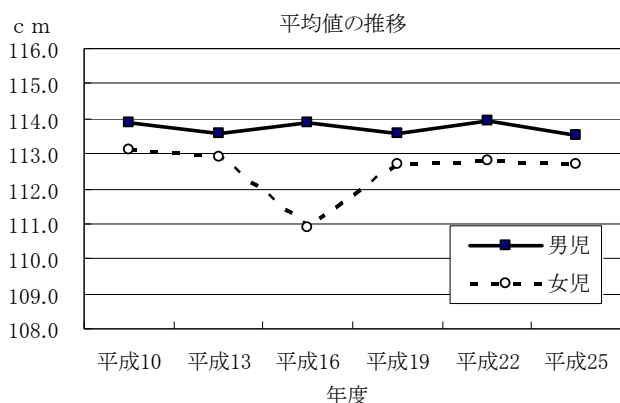
年齢区分Aでは、平均値が男児は111.8cm、女児は110.7cmである。また、年齢区分Bでは、平均値が男児は114.6cm、女児は114.0cmである。全体の平均は、男児が113.5cm、女児が112.7cmである(表8)。

表8

年度	性別	年齢区分A (~5歳11か月)						年齢区分B (6歳0か月～)						全体			
		サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数
平成25年度	男児	431	111.8	4.6	4.1	128.8	100.2	645	114.6	4.6	4.0	129.6	100.4	1076	113.5	4.8	4.2
	女児	371	110.7	4.4	3.9	126.2	98.6	564	114.0	4.5	4.0	128.7	101.7	935	112.7	4.7	4.2

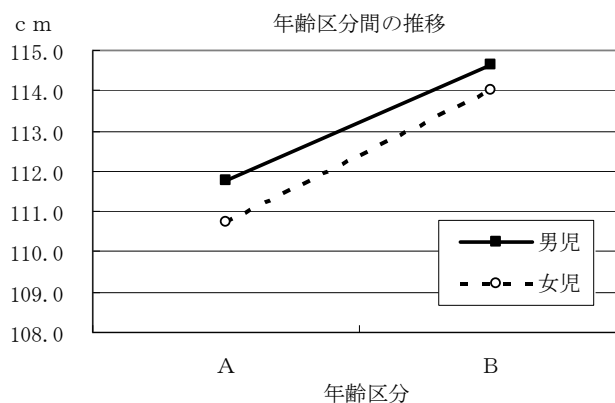
(イ) 平均値の推移 (過去5回)

図 21



(ウ) 年齢区分間の比較

図 22



身長平均値の推移では、男児が女児よりも大きい状況は変わらないが、これまでの調査と比べて男女の差が小さくなった(図 21)。年齢区分間の比較では、A区分とB区分の差が、男児で 2.8cm、女児で 3.3cm となり、男児・女児ともに差が出た(図 22)。

イ 体重

(7) 平成 25 年度 調査結果

<調査結果の概要>

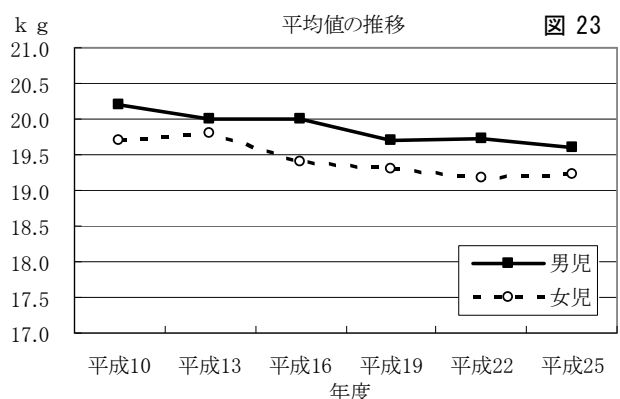
年齢区分 A では、平均値が男児は 19.0kg、女児は 18.5kg である。また、年齢区分 B では、平均値が男児は 20.0kg、女児は 19.7kg である。全体の平均は、男児が 19.6kg、女児が 19.2kg である(表 9)。

表 9

年度	年齢 項目 性別	年齢区分 A (~5歳11か月)						年齢区分 B (6歳0か月~)						全 体			
		サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数
平成 25 年度	男 児	430	19.0	2.6	13.9	32.4	14.1	646	20.0	2.8	14.2	36.7	14.2	1076	19.6	2.8	14.3
	女 児	371	18.5	2.4	13.1	35.5	12.4	564	19.7	2.8	14.3	33.4	13.6	935	19.2	2.7	14.2

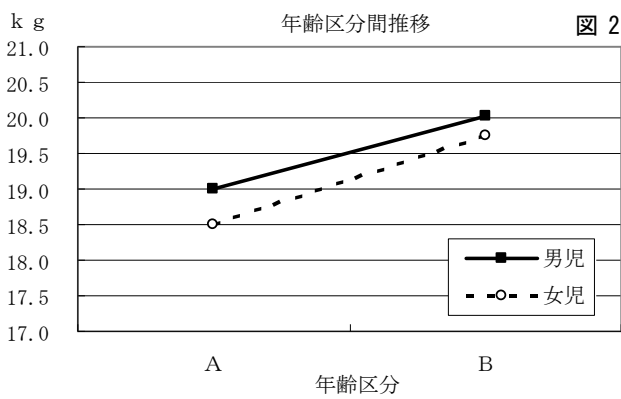
(イ) 平均値の推移 (過去5回)

図 23



(ウ) 年齢区分間の比較

図 24



体重平均値の推移は、平成 10 年度の調査と比較して男児・女児ともに低下する傾向が見られる。今回の調査で、男児は平均値が 19.6kg、女児は平均値が 19.2kg とほぼ横ばいの変化となった(図 23)。年齢区分間の比較では、A区分とB区分の差が、男児で 1.0kg、女児で 1.2kg となっているが、この数値も平成 22 年度調査とほぼ同じ値である(図 24)。

ウ カウプ指数

表 10

年度	年齢 項目 性別	年齢区分A(～5歳11か月)						年齢区分B(6歳0か月～)						全 体			
		サンプル数	平均	標準偏差	変動係数	最高値	最低値	サンプル数	平均	標準偏差	変動係数	最高値	最低値	サンプル数	平均	標準偏差	変動係数
		平成25年度	男児	430	15.2	1.3	8.6	21.4	11.0	645	15.2	1.5	10.1	28.5	12.3	1075	15.2
	女児	371	15.0	1.3	8.8	24.1	10.1	564	15.1	1.5	9.9	22.8	11.3	935	15.1	1.4	9.5

カウプ指数は、発育の状況を示す指数の一つであり、身長と体重の釣り合いを数値で示したものである。平成22年度調査のカウプ指数は、男児で15.2、女児で15.0であった。今回の調査でも、男児で15.2、女児で15.1とほぼ同じ値であり、男児、女児ともに発育状態が「普通」であることを示している。

《カウプ指数》

以下の式により算出される、肥満度を表す体格指数である。

$$\text{カウプ指数} = \left[ \frac{\text{体重(g)}}{\{\text{身長(cm)} \times \text{身長(cm)}\}} \right] \times 10$$

一般にボディマス指数(BMI)と呼ばれる指数と同じであるが、乳幼児に対して用いられ、年齢が3、4、5歳の場合は、カウプ指数が14.5から16.5であれば、発育状態を「普通」とする。

2 補助調査の結果と分析

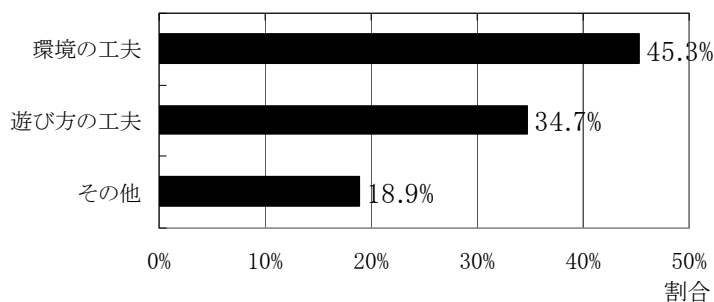
運動能力調査と併せて、補助調査アンケートを実施した。調査項目は、各園が工夫している幼児が体を動かすことを楽しむための遊び、小学校と連携した取組、幼児の日常生活における動作や身のこなしに関する課題意識、運動が得意な幼児の動きの傾向等について調べる内容とした。なお、質問に用いたアンケート用紙は214ページに掲載した。

(1) 各園が工夫している幼児が体を動かすことを楽しむための遊び

幼児が体を動かすことを楽しむよう、各園が取り組んでいる遊びの工夫については、回答の記述を分類すると、「環境の工夫」が「遊び方の工夫」を10ポイント程度上回っていた(図25)。

「環境の工夫」の具体的な取組としては、「保育室内に巧技台を組んでうんていを設置している」、「園庭の山を利用して滑り台を設置している」、「すぐに遊び出せるように鬼ごっこの場所を作っている」、「一人ずつ使って遊べるようなボールの数を用意している」、「色々な運動や遊びに興味や関心をも

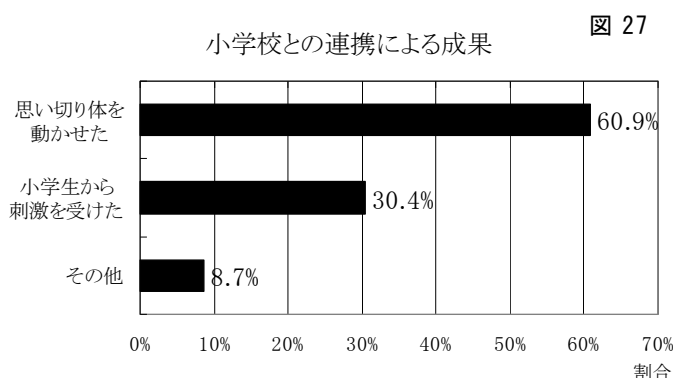
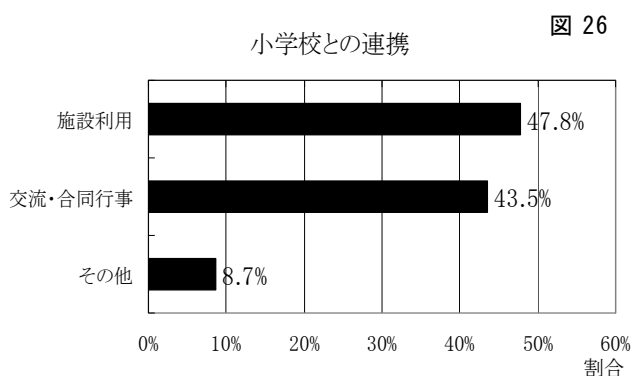
幼児が体を動かすための工夫 図 25



って取り組めるように、記録カードを用意している」、「広い場所で遊べるように隣接の公園を使用している」などがあつた。また、「遊び方の工夫」としては、「たくさんの動きが入るような遊び方を工夫している」、「ドッジボールやリレーにおいて、基本的なルールは決めるが、遊ぶ中で幼児が必要を感じたルールを取り入れるようにする」、「鬼遊びにおいて、楽しみながら取り組めるように発達に応じたルールに変える」、「ロープでの遊びについて、握り方や手足の掛け方、渡り方などの技術的な指導をする」などが挙げられた。園ごとに幼児の実態に合わせ、楽しんで体を動かせる工夫を行っていることがうかがえた。

### (2) 小学校との連携事例

幼児の健康・体力づくりに関する小学校との連携については、回答の記述を分類すると「施設利用」が47.8%、「交流・合同行事」が43.5%であった。具体的な内容としては、校庭や体育館、プール等の施設・設備を活用しているとの回答が多く、広い場所を利用し、幼児に伸び伸びと運動をさせていることが分かった。また、小学生と共に活動することで、幼児が思い切り体を動かしたり、よい刺激を受けて様々な動きに挑戦したりするようになっているとの回答もあった（図26、27）。

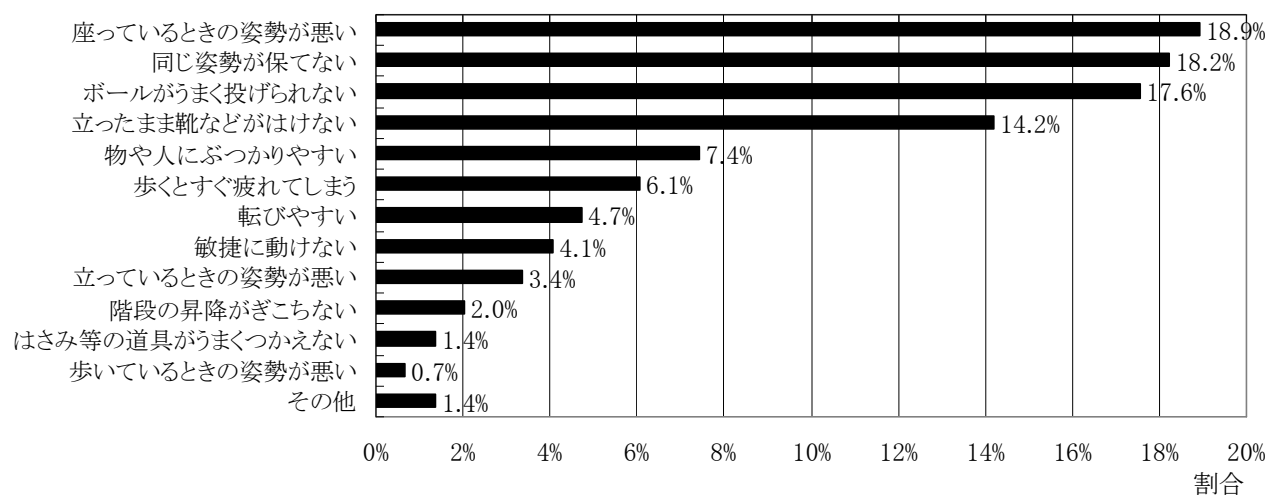


### (3) 日常生活に必要な動作や身のこなし

幼児の日常生活に必要な動作や身のこなしなどについて、調査実施園で教員が感じていることを三つ以内で回答してもらった（図28）。

「座っているときの姿勢が悪い。(18.9%)」、「同じ姿勢が保てない。(18.2%)」、「ボールがうまく投げられない。(17.6%)」、「立ったまま靴などがはけない。(14.2%)」など、姿勢やバランス感覚、ボール投げに関する内容について気になるとの回答が多かった。それに対し、「階段の昇降がぎこちない。(2.0%)」、「はさみ等の道具がうまくつかえない。(1.4%)」についての回答はほとんどなかった。また、姿勢については、「立っているときの姿勢が悪い。(3.4%)」、「歩いているときの姿勢が悪い。(0.7%)」となっており、座っているときと比較して悪いと感じている回答が少なかった。このことにより、日常生活の中で教員が最も気になっている幼児の姿勢は座っているときの姿勢であることが分かった。

図28 幼児の日常生活に必要な動作や身のこなしなどについて



## (4) 幼児の動作や身のこなしで気になる点を改善するための工夫

前述の、幼児の動作や身のこなしで気になる点を改善するための工夫として、各園で取り組んでいる主な取組は、以下のとおりであった（表11）。

園ごとに幼児の実態に応じて、運動の機会を意図的に増やす取組を位置付けたり、日常生活の中で歩く機会を増やしたりと、活動を工夫していることが分かった。また、特に課題として多く挙げられていた座っているときの姿勢や立ったまま靴を履くことについては、改善策となる手だてを多くの園で行っていることが分かった。さらに、保護者と連携して気になる点を改善するように取り組んでいる園も見られた。

表 11

<p><b>◆ 運動の機会を増やす取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝ランニングの時間に、走るだけでなく多様な体の動き（巧技台を使った遊び、玉入れ、ボール投げなど）を取り入れ、身体諸機能の発達を促す。</li> <li>・ 体を動かす遊びを、毎日意図的に組み込む。</li> <li>・ ドッジボールやサッカーなど集団遊びを積極的に行い、十分に体を動かすようにしている。</li> <li>・ 片道 30 分以上歩く「徒歩遠足」を年に 5～6 回、園外保育として年間計画に位置付けている。</li> <li>・ ドッジボールや的当てなど、楽しみながら投げる動作を誘発する遊び方の工夫をする。</li> </ul> <p><b>◆ 日常生活の取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遠足や日々の保育の中でたくさん歩く経験をし、それを自信につなげるようにしている。</li> <li>・ 幼児の実態に合わせて、集中して絵本や話などを聞くことができるように、読み聞かせを短い時間で行うなどの工夫をしている。</li> <li>・ 徒歩での通園を推奨している。</li> <li>・ 指先を使う活動を増やしている。</li> </ul> <p><b>◆ 姿勢に関する取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一定の時間、同じ姿勢を保つことを積み重ねることで、園児のバランス感覚や姿勢の改善に努めている。</li> <li>・ 正しい姿勢で話が聞けるよう、様々な場面で教師が手本となり繰り返し指導する。</li> <li>・ 椅子に座って落ち着いて過ごす機会を増やしたり、環境を作ったりする。</li> <li>・ 「背中を伸ばす」、「足裏を床に付ける」など、具体的な言葉で望ましい姿勢を伝えて指導する。</li> </ul> <p><b>◆ 靴を履くことに関する取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立ったまま靴を履くように促し、幼児の意識を高めている。</li> <li>・ 玄関にベンチを置き、直に床に座って靴を脱ぐのではなく、高さを意識させる。</li> <li>・ 立って行く靴の履き方を、具体的に分かるように指導する。</li> <li>・ 就学を意識して靴箱の床にイラストと言葉による表示を置いたり、学級全体で指導する機会を作ったりしている。</li> </ul> <p><b>◆ その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 意識できるように声を掛けたり、頑張っている幼児の姿を認め、刺激になるようにしたりしている。</li> <li>・ 保護者にも実態を知らせ、家庭でも同じように取り組んでもらえるようにしている。</li> <li>・ 幼児の実態を捉えて、教師自身が意識をもって保育を行う。</li> </ul>
--

## (5) 幼児の行っている「動き」の比較について

今回の調査において、運動能力調査5種目の全ての結果が平均より上位に位置する幼児2名について、楽しんで体を動かしている遊びの種類を調べるとともに、その中に含まれる「動き」の要素を30種類に分類して集計した。「動き」の要素については、次のように分類した。

《「動き」について》

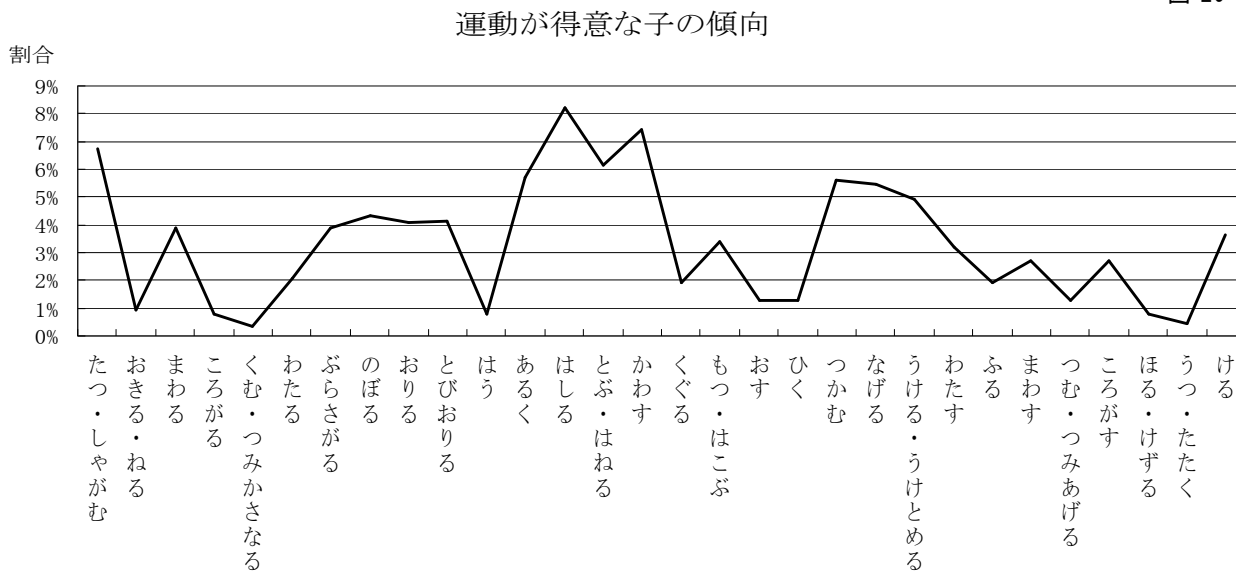
本調査における動きは、幼児が自ら選んだ遊びをしている様子を観察・調査した結果から、財団法人体育科学センターが提案した基本的動作及び、「平成17年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ 幼少期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究」において使用された基本動作のそれぞれを参考として作成した。

- |              |               |          |            |
|--------------|---------------|----------|------------|
| 1. たつ・しゃがむ   | 2. おきる・ねる     | 3. まわる   | 4. ころがる    |
| 5. くむ・つみかさなる | 6. わたる        | 7. ぶらさがる | 8. のぼる     |
| 9. おりる       | 10. とびおりる     | 11. はう   | 12. あるく    |
| 13. はしる      | 14. とぶ・はねる    | 15. かわす  | 16. くぐる    |
| 17. もつ・はこぶ   | 18. おす        | 19. ひく   | 20. つかむ    |
| 21. なげる      | 22. うける・うけとめる | 23. わたす  | 24. ふる     |
| 25. まわす      | 26. つむ・つみあげる  | 27. ころがす | 28. ほる・けずる |
| 29. うつ・たたく   | 30. ける        |          |            |

※ 動きの要素については、「はしる」「なげる」等、よく見られることが予想されるものを抽出したほか、「およぐ」「もぐる」等、特定の季節に影響される動作を省くなど、本調査の調査委員会で検討し、決定した。

遊びの中に見られる動きの要素の出現頻度から作成した集計結果を、図29に示した。この結果を見ると、運動能力が上位に位置する幼児は、「たつ・しゃがむ」、「あるく」、「はしる」、「とぶ・はねる」、「かわす」、「つかむ」、「なげる」、「うける・うけとめる」といった要素の動きがある遊びを多く行っていることが分かった。また、「まわる」、「ぶらさがる」、「のぼる」、「おりる」、「とびおりる」といった動きも比較的多く行われていることから、運動能力が上位に位置する幼児は様々な遊びに取り組み、多様な動きを体験していることが考えられる。

図 29



第4 調査研究のまとめと今後の課題

1 調査研究のまとめ

幼児の運動能力を種目別に見ると、「25m走」は昭和55年度の第1回調査からほぼ横ばいであり、大きな変化は見られない。「立ち幅跳び」は低下傾向ではあるものの、その変化は緩やかである。「ソフトボール投げ」については、男児は低下傾向となっているが、女児は横ばいが続いており、上昇に転ずることが期待できる。「体支持持続時間」は、男児、女児ともに、ここ数



回の調査ではほぼ横ばいであった。「両足連続跳び越し」は、年齢区分間の有意差検定では有意差がないとの結果が出ている。ほぼ横ばいで推移しているが、調査年度ごとの変化も大きいいため、明確な傾向は不明である。

## 2 幼児が楽しみながら体を動かす遊びの充実に向けた指導・環境の工夫

幼稚園教育要領の領域「健康」には、内容を取り扱う際の留意事項として「様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動すること」等が示され、いろいろな遊びの中で十分に体を動かすことが求められている。また、東京都教育委員会では、平成25年2月の「総合的な子供の基礎体力向上方策 第2次推進計画」において、幼児期における運動の意義として「幼児期に運動を調整する能力を高めておくことは、児童期以降の運動発達の基盤を形成するという重要な意味をもっている」とし、体力向上に向けて今まで以上の取組が必要であると示している。

そのためには、幼児の経験の少ない動きを効果的に取り入れていく必要がある。今回の調査結果から、運動能力が上位に位置する幼児は様々な動きに取り組んでいると考えられる。そこで、様々な動きに挑戦するための一例として、「わたる」、「ぶらさがる」、「のぼる」、「おりる」、「とびおりる」といった、上下の動きの要素を取り入れるための工夫について紹介する。

### [上下の動きの要素を取り入れるための工夫]

遊びの中で、幼児が自ら体を動かしたくなる遊びを工夫し、その遊びの中で自然に動きを経験していけるようにすることが大切である。その際、ルールや場を工夫することで上下の動きを経験させることができる。

例えば、探検ごっこなどの遊びをしている幼児に、巧技台やはしごなどを使うことを投げかけ、経験させたい動きに応じて構成を工夫する。「ここは急な山道だよ、のぼれるかな。」、「上がったならその先は大きながけだよ。飛び降りられるかな。」等、幼児にイメージをもたせ、経験の少ない動きを楽しめるようにすることで、幼児のやってみようという思いが実現できるようにする。

また、固定遊具等も、できるようになったら印をつけるようなチャレンジカードを作り、幼児が遊びの中で「ここまでできるようになりたい。」、「明日もまたやりたい。」と目的をもって取り組めるように工夫していく。

このように、教師が幼児の経験の少ない動きを把握し、それに合わせてルールを工夫したり、遊具や用具を組み合わせたことで、その動きを経験させていく必要がある。

## 3 今後の課題

第1回調査と比較すると、運動能力は依然として低位で推移してはいるものの、低下傾向に一部変化が見られた種目もある。近年の運動能力向上に向けた取組の成果が現れている可能性が考えられ、この変化が継続的なものであるかを今後も検証していく必要がある。

また、本調査研究においては、動きの要素を30種類に分類し、幼児が楽しんで体を動かしている遊びの傾向を捉えて分析した。その結果や調査報告内容の成果について、広く普及させていく必要があると考える。

○ 種目別調査結果の推移

① 25m走・平均値等推移

年度	性別	年齢 項目	年齢区分A			年齢区分B			全 体		
			平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.1	0.6	9.8	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和58年度	男児		6.3	0.6	9.5	6.1	0.5	8.2	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.5	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和61年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.1	0.5	8.2	6.2	0.5	8.1
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
平成元年度	男児		6.4	0.8	12.2	6.1	0.6	9.0	6.2	0.7	11.3
	女児		6.5	0.6	9.6	6.3	0.6	9.3	6.4	0.6	9.4
平成4年度	男児		6.3	0.6	9.1	6.1	0.5	8.8	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.5	8.4	6.3	0.5	8.0	6.4	0.5	7.8
平成7年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.2	0.5	8.1	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.5	7.8
平成10年度	男児		6.5	0.7	10.8	6.3	0.7	11.1	6.4	0.7	10.9
	女児		6.6	0.7	10.6	6.5	0.6	9.2	6.5	0.6	9.2
平成13年度	男児		6.5	0.7	10.7	6.2	0.6	9.5	6.4	0.7	10.3
	女児		6.6	0.6	8.9	6.5	1.0	14.7	6.5	0.8	12.7
平成16年度	男児		6.5	0.8	12.5	6.2	0.7	10.6	6.3	0.7	11.7
	女児		6.6	1.0	14.7	6.3	0.6	9.1	6.4	0.8	12.0
平成19年度	男児		6.5	1.0	15.6	6.2	0.6	10.4	6.3	0.8	13.2
	女児		6.5	0.6	8.6	6.4	0.6	9.9	6.4	0.6	9.4
平成22年度	男児		6.5	1.9	29.8	6.2	0.8	12.9	6.3	1.4	21.6
	女児		6.6	0.6	9.3	6.4	0.6	9.4	6.5	0.6	9.4
平成25年度	男児		6.4	0.7	11.0	6.2	0.7	10.5	6.3	0.7	10.8
	女児		6.5	0.8	11.5	6.3	0.6	9.9	6.4	0.7	10.7

② 立ち幅跳び・平均値等推移

年度	性別	年齢 項目	年齢区分A			年齢区分B			全 体		
			平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		108.1	16.5	15.3	114.8	17.5	15.2	112.2	17.4	15.5
	女児		97.9	15.8	16.1	105.0	15.7	15.0	102.2	16.1	15.8
昭和58年度	男児		109.8	17.4	15.8	117.3	16.8	14.3	113.7	17.5	15.4
	女児		101.1	15.3	15.1	107.5	16.1	15.0	104.4	16.0	15.3
昭和61年度	男児		109.4	16.6	15.2	116.4	17.3	14.9	113.5	17.4	15.3
	女児		101.1	15.9	15.7	107.3	16.7	15.6	104.9	16.7	15.9
平成元年度	男児		110.3	16.1	14.6	117.7	17.2	14.6	114.5	17.4	15.2
	女児		100.0	16.7	16.7	106.2	16.2	15.3	103.8	16.8	16.2
平成4年度	男児		108.4	17.2	15.9	116.5	17.5	15.1	113.2	17.7	15.6
	女児		98.7	15.7	15.9	104.8	16.7	16.1	102.3	16.5	16.1
平成7年度	男児		105.9	17.7	16.7	111.8	18.2	16.3	109.8	18.3	16.7
	女児		96.1	17.7	18.4	101.3	16.9	16.7	99.6	17.2	17.3
平成10年度	男児		105.4	18.9	17.9	113.0	18.9	16.7	110.0	19.8	18.0
	女児		93.9	17.2	18.3	98.7	18.7	18.9	97.1	18.3	18.8
平成13年度	男児		103.2	18.3	17.7	110.6	19.2	17.3	107.5	19.1	17.8
	女児		94.0	17.2	18.3	99.0	17.1	17.3	96.9	17.3	17.9
平成16年度	男児		104.0	18.8	18.0	112.4	18.7	16.7	109.0	19.2	17.6
	女児		95.3	15.7	16.5	102.2	15.2	14.9	99.4	15.8	15.9
平成19年度	男児		103.1	19.4	18.8	110.5	19.8	17.9	107.5	20.0	18.6
	女児		97.3	17.0	17.4	100.6	17.7	17.6	99.3	17.5	17.6
平成22年度	男児		101.5	16.9	16.6	109.2	18.9	17.3	106.3	18.6	17.5
	女児		93.9	17.0	18.1	100.1	16.7	16.7	97.6	17.1	17.5
平成25年度	男児		101.9	21.8	21.3	106.2	21.6	20.4	104.5	21.8	20.8
	女児		95.9	18.8	19.6	99.5	20.9	21.0	98.1	20.2	20.6

③ ソフトボール投げ・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分A			年齢区分B			全体		
	項目	性別	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		7.0	2.5	35.7	8.5	3.1	36.5	7.8	2.9	37.2
	女児		4.4	1.4	31.8	5.1	1.6	31.4	4.8	1.6	33.3
昭和58年度	男児		7.0	2.7	38.6	8.3	3.1	37.3	7.7	3.0	39.0
	女児		4.4	1.5	34.1	5.1	1.7	33.3	4.8	1.6	33.3
昭和61年度	男児		6.8	2.4	35.3	8.1	2.8	34.9	7.5	2.7	36.0
	女児		4.5	1.5	33.9	5.2	1.6	31.2	4.9	1.6	32.7
平成元年度	男児		6.5	2.4	36.2	7.8	2.8	35.6	7.3	2.7	37.0
	女児		4.2	1.5	35.0	4.8	1.6	33.0	4.6	1.6	34.8
平成4年度	男児		6.3	2.4	38.9	7.7	2.9	37.3	7.1	2.8	39.4
	女児		4.1	1.4	34.2	4.9	1.7	34.3	4.6	1.6	34.8
平成7年度	男児		5.9	2.2	37.3	6.7	2.6	38.8	6.5	2.5	38.5
	女児		4.2	1.3	31.0	4.6	1.5	32.6	4.5	1.5	33.3
平成10年度	男児		6.1	2.2	36.1	6.9	2.8	40.6	6.6	2.6	39.4
	女児		4.0	1.4	35.0	4.5	1.6	35.6	4.3	1.6	37.2
平成13年度	男児		5.7	2.4	41.8	6.8	2.8	40.7	6.3	2.7	42.3
	女児		4.0	1.4	33.7	4.7	1.5	33.0	4.4	1.5	34.2
平成16年度	男児		5.7	2.3	39.6	6.8	2.9	42.6	6.4	2.7	42.5
	女児		4.0	1.5	36.7	4.5	1.4	31.8	4.3	1.5	34.2
平成19年度	男児		5.7	2.6	45.9	6.7	2.7	40.8	6.3	2.7	43.0
	女児		3.9	1.4	36.4	4.6	1.7	37.6	4.3	1.7	38.4
平成22年度	男児		5.4	2.4	43.7	6.6	2.7	41.8	6.1	2.7	43.6
	女児		3.9	1.4	36.8	4.5	1.6	34.7	4.3	1.5	36.0
平成25年度	男児		5.6	2.7	48.6	6.1	2.5	40.7	5.9	2.6	43.9
	女児		4.1	1.6	38.6	4.5	1.5	33.9	4.3	1.6	36.2

④ 体支持持続時間・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分A			年齢区分B			全体		
	項目	性別	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		72.2	48.6	67.3	86.5	62.6	72.4	80.9	58.0	71.7
	女児		70.0	44.6	63.7	85.9	55.1	64.1	79.7	51.8	65.0
昭和58年度	男児		69.3	50.1	72.3	77.8	50.3	64.7	73.6	50.4	68.5
	女児		66.8	45.5	68.1	78.0	52.5	67.3	72.6	49.6	68.3
昭和61年度	男児		61.7	40.6	65.8	68.9	43.2	62.7	65.9	42.6	64.6
	女児		62.6	39.7	63.5	70.4	43.9	62.3	67.4	42.5	63.1
平成元年度	男児		54.1	36.5	67.5	62.6	45.0	71.8	59.4	41.7	70.2
	女児		54.1	36.3	67.1	59.9	38.0	63.4	58.1	37.8	65.1
平成4年度	男児		50.0	34.6	69.1	63.4	47.6	75.1	57.4	41.9	73.0
	女児		47.6	33.5	70.5	62.5	60.8	97.4	56.8	50.5	88.9
平成7年度	男児		50.8	31.0	61.0	57.3	37.9	66.4	56.1	36.3	64.7
	女児		50.9	36.0	70.7	58.7	37.8	64.3	55.7	37.3	67.0
平成10年度	男児		41.7	26.5	63.5	51.4	34.1	66.3	48.7	34.3	70.4
	女児		43.7	29.2	66.8	51.2	38.9	76.0	49.0	35.3	72.0
平成13年度	男児		47.2	42.5	90.1	55.0	39.5	71.7	51.8	40.9	79.0
	女児		42.6	27.7	65.0	51.7	36.9	71.3	47.9	33.7	70.3
平成16年度	男児		45.0	34.2	76.1	51.1	34.8	68.0	48.6	34.7	71.3
	女児		44.9	34.4	76.6	52.4	36.6	69.8	49.4	35.9	72.6
平成19年度	男児		40.3	31.7	78.7	50.9	36.4	71.4	46.6	34.9	74.9
	女児		45.2	33.8	74.6	50.1	40.4	80.7	48.1	37.9	78.8
平成22年度	男児		40.8	26.6	65.3	52.7	37.3	70.7	48.1	34.1	70.9
	女児		42.0	30.2	71.9	52.5	37.9	72.3	48.2	35.3	73.3
平成25年度	男児		44.9	34.6	77.1	50.8	40.5	79.7	48.4	38.3	79.2
	女児		46.3	38.0	82.3	52.3	38.4	73.5	49.9	38.4	76.9

第12回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究

⑤ 両足連続跳び越し・平均値等推移

年度	年齢 項目 性別	年齢区分A			年齢区分B			全 体		
		平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
昭和 55 年度	男 児	5.6	1.3	23.2	5.3	1.1	20.8	5.5	1.2	21.8
	女 児	5.4	1.1	20.4	5.2	0.9	17.3	5.3	1.0	18.9
昭和 58 年度	男 児	5.5	1.4	25.5	5.2	1.0	19.2	5.4	1.2	22.2
	女 児	5.4	1.3	24.1	5.1	0.7	13.7	5.2	1.1	21.5
昭和 61 年度	男 児	5.6	1.5	26.9	5.3	1.3	24.9	5.4	1.4	25.9
	女 児	5.6	1.5	26.3	5.3	1.2	22.7	5.4	1.3	24.1
平成 元 年度	男 児	5.6	1.3	23.8	5.2	1.1	20.1	5.4	1.2	22.2
	女 児	5.5	1.1	20.2	5.3	0.9	17.7	5.4	1.0	18.5
平成 4 年度	男 児	5.8	1.7	29.0	5.4	1.4	26.1	5.6	1.5	26.8
	女 児	5.7	1.4	24.4	5.4	1.2	22.7	5.5	1.3	23.6
平成 7 年度	男 児	5.5	1.5	27.3	5.2	1.3	25.0	5.4	1.4	25.9
	女 児	5.5	1.2	21.8	5.3	1.0	18.9	5.4	1.1	20.4
平成 10 年度	男 児	5.7	1.7	29.8	5.3	1.3	24.5	5.4	1.5	27.8
	女 児	5.7	1.6	28.1	5.5	1.3	23.6	5.5	1.4	25.5
平成 13 年度	男 児	5.7	1.9	33.8	5.2	1.1	21.8	5.4	1.5	28.3
	女 児	5.7	1.6	28.8	5.5	1.7	30.4	5.6	1.7	29.6
平成 16 年度	男 児	5.7	1.9	32.4	5.6	2.9	52.0	5.7	2.5	44.6
	女 児	5.7	1.3	23.1	5.4	1.0	18.6	5.5	1.1	20.8
平成 19 年度	男 児	5.8	1.6	27.6	5.4	1.3	24.5	5.6	1.5	26.1
	女 児	5.6	1.2	21.0	5.4	1.2	22.0	5.5	1.2	21.6
平成 22 年度	男 児	5.5	1.7	30.3	5.3	1.2	23.0	5.4	1.4	26.3
	女 児	5.6	1.3	22.5	5.3	1.3	24.8	5.4	1.3	24.1
平成 25 年度	男 児	5.6	1.6	28.2	5.4	1.4	26.3	5.5	1.5	27.2
	女 児	5.6	1.3	23.2	5.5	1.3	24.1	5.5	1.3	23.7

## ○ 参考資料

### 運動能力測定の方法について

#### 1 25m走

- ① コース幅 80cm 前後の 30m の直線路を作る。
- ② スタートラインに立たせ、両足を前後に開き、「よいい」の姿勢をとらせる。
- ③ 30m 地点のゴールまで疾走させ、スタートから、25m 地点を通過するまでの時間（幼児の胸が通過した時点）を測る。
- ④ 1/100 秒を切り捨て、1/10 秒の単位で測定する。
- ⑤ 測定は1回だけ行う。

#### 2 立ち幅跳び

- ① 床に幅 2 cm の踏み切り線を引き、直角に測定用のメジャーを置く。
- ② 幼児はくつ下などを脱ぎ、はだしになる。
- ③ 踏み切り線を踏まないように、両足をわずかに離して立ち、両足同時踏み切りで跳ぶ。
- ④ 二重踏み切りや一方の足による踏み切りはやり直しをさせる。
- ⑤ 踏み切り線から着地点までの最短距離を cm 単位で測定する。（cm 未満は切り捨てる。）
- ⑥ 2回測定し、良い方を記録する。

#### 3 ソフトボール投げ

- ① 幅 6 m の測定用の線を 1 m 間隔で引く。
- ② 両足を前後に開き、投球ラインを踏まないように立つ。（投げる手と反対の足を前にする。）
- ③ 投球ラインを超えないように、助走せずオーバースローで投げる。
- ④ 投げるときに足が上がってもよいが、投球ラインを超えないようにする。
- ⑤ 記録はメートル単位で測定する。（メートル未満は切り捨てる。）
- ⑥ 2回続けて投球し、良い方を記録する。

#### 4 体支持持続時間

- ① 幼児の肘の高さ程度の巧技台 2 台を肩幅位の間隔に置き、間の床に踏み台を置く。
- ② 巧技台の間に立ち、「よいい」の合図で、両手を巧技台の端に置く。
- ③ 「はじめ」の合図で、両腕を伸ばし、足を床から離す。足が離れたら踏み台を外す。
- ④ 両腕で体重を支えられなくなるまで続ける。
- ⑤ 記録は秒単位で測定する。（秒未満は切り捨てる。）
- ⑥ 測定は1回だけ行う。

#### 5 両足連続跳び越し

- ① 4 m 50cm の距離に 50cm 間隔で 10 個の積み木（縦 5cm 横 10cm 高さ 5cm）を並べる。
- ② 最初の積み木の前に立ち、「はじめ」の合図で 10 個の積み木を連続して跳び越す。
- ③ 両足を揃えて跳ばないとき、積み木を 2 個以上一度に跳び越したとき、積み木を散乱させた場合などは、やり直す。
- ④ 1/100 秒を切り捨て、1/10 秒単位で測定する。
- ⑤ 2回続けて測定し、良い方を記録する。

6 補助調査アンケート

平成25年10月2日

補助調査アンケート

園名 \_\_\_\_\_ 立 \_\_\_\_\_ 園 \_\_\_\_\_ 園長名 \_\_\_\_\_

このアンケートは、5歳児の運動能力調査実施と同時に、以下の目的で各園より御提出いただくものです。お手数をお掛けしますが、よろしくお願いいたします。

※ 5歳児が楽しんで体を動かしている遊びについて、各園での工夫や、遊びで見られる「動き」について調べ、分析する。

※ 分析結果から、運動能力の向上を図るために、効果的な運動遊びや様々な工夫について提言する。

※ 「動き」について

本調査における動きは、幼児の自由遊びを観察・調査した結果から、財団法人体育科学センターが提案した基本的動作及び、「平成17年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告I 幼少期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究」、NHK「からだであそぼ」において使用された基本動作のそれぞれを参考に作成した。

◎貴園の5歳児について、以下の質問にご回答ください。

1 今回の調査において運動能力調査5種目の全ての結果が、平均より上位に位置する園児2名の傾向について御記入下さい。

- ※ 御記入いただく対象の園児は、運動能力調査を実施していただき、記録を電子データで入力していただくと、候補となる園児が表示されますので、その中から抽出してください。
- ※ 対象となる園児がない場合は、記入の必要はありません。
- ※ 原則として、性別の異なる園児1名ずつを抽出してください。（難しい場合は、園児の性別は同じでも可）
- ※ それぞれの項目は、担任が把握している範囲で御記入ください。不明の点は空欄で構いません。

項目	傾向	
対象園児の年齢	( )歳( )月 男・女	( )歳( )月 男・女
園児が楽しんで体を動かしている遊び		
上記の遊びで見られる動き (複数回答可)		

(動き)

- |              |               |          |            |
|--------------|---------------|----------|------------|
| 1. たつ・しゃがむ   | 2. おきる・ねる     | 3. まわる   | 4. ころがる    |
| 5. くむ・つまかさなる | 6. わたる        | 7. ぶらさがる | 8. のぼる     |
| 9. おりる       | 10. とびおりる     | 11. はう   | 12. あるく    |
| 13. はしる      | 14. とぶ・はねる    | 15. かむす  | 16. くぐる    |
| 17. もつ・はこぶ   | 18. おす        | 19. ひく   | 20. つかむ    |
| 21. なげる      | 22. うける・うけとめる | 23. わたす  | 24. ふる     |
| 25. まわす      | 26. つむ・つまあげる  | 27. ころがす | 28. ほる・けずる |
| 29. うつ・たたく   | 30. ける        |          |            |

2 貴園で、園児が体を動かすことを楽しむために工夫をしている遊びがありましたら、2つ以内でその内容を御記入ください。

遊び	含まれている動き (複数回答可)	環境の工夫 (場、遊具、用具等の工夫)	遊び方の工夫 (設定、ルール等の工夫)	その他の工夫

(動きは、1の項目と同じ番号でお答えください。)

3 「園児の日常生活に必要な動作や身のこなしなど」について、下記のように感じられる事例がありましたら3つ以内で○をつけてください。(5歳児の全体的な印象でお答えください。)

- |  |  |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 転びやすい           | <input type="checkbox"/> 階段の昇降がぎこちない   |
| <input type="checkbox"/> 立ったまま靴などがはけない   | <input type="checkbox"/> 物や人にぶつかりやすい   |
| <input type="checkbox"/> はさみ等の道具がうまく使えない | <input type="checkbox"/> 同じ姿勢が保てない     |
| <input type="checkbox"/> 歩くとすぐ疲れてしまう     | <input type="checkbox"/> 立っているときの姿勢が悪い |
| <input type="checkbox"/> ボールがうまく投げられない   | <input type="checkbox"/> 座っているときの姿勢が悪い |
| <input type="checkbox"/> 敏捷に動けない         | <input type="checkbox"/> 歩いているときの姿勢が悪い |
| <input type="checkbox"/> その他 ( )         |  |

4 質問3について、貴園で工夫されていることがあれば、御記入ください。

園で行っている具体的な取組

5 園児の健康増進・体力づくり等について小学校と連携して取り組み、成果をあげている事例があれば、御記入ください。

取組事例 (指導・援助の工夫等を含む)	成 果

6 その他 園児の健康増進・体力づくりや本調査についての御意見があれば御記入ください。

--

御協力ありがとうございました。

《平成25年度「第12回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究」調査実施園》

千代田区立麴町幼稚園	千代田区立九段幼稚園	千代田区立番町幼稚園
千代田区立お茶の水幼稚園	千代田区立千代田幼稚園	千代田区立昌平幼稚園
千代田区立いずみこども園	千代田区立ふじみこども園	中央区立月島第一幼稚園
中央区立豊海幼稚園	港区立芝浦幼稚園	港区立中之町幼稚園
新宿区立市谷幼稚園	新宿区立早稲田幼稚園	新宿区立東戸山幼稚園
新宿区立西戸山幼稚園	文京区立明化幼稚園	文京区立後楽幼稚園
台東区立竹町幼稚園	台東区立田原幼稚園	台東区立育英幼稚園
墨田区立緑幼稚園	墨田区立八広幼稚園	江東区立第五砂町幼稚園
江東区立ひばり幼稚園	江東区立もみじ幼稚園	品川区立城南幼稚園
品川区立第一日野すこやか園	品川区立八潮わかば幼稚園	目黒区立みどりがおかこども園
目黒区立ふどう幼稚園	目黒区立ひがしやま幼稚園	世田谷区立塚戸幼稚園
渋谷区立広尾幼稚園	渋谷区立千駄谷幼稚園	渋谷区立山谷かきのみ園
杉並区立高円寺北子供園	杉並区立成田西幼稚園	豊島区立西巣鴨幼稚園
豊島区立南長崎幼稚園	北区立うめのき幼稚園	北区立さくらだ幼稚園
北区立ほりふな幼稚園	荒川区立南千住第二幼稚園	荒川区立町屋幼稚園
板橋区立高島幼稚園	板橋区立新河岸幼稚園	練馬区立北大泉幼稚園
練馬区立光が丘わかば幼稚園	練馬区立光が丘さくら幼稚園	葛飾区立飯塚幼稚園
葛飾区立水元幼稚園	江戸川区立小松川幼稚園	江戸川区立船堀幼稚園
江戸川区立鹿本幼稚園	府中市立矢崎幼稚園	府中市立小柳幼稚園
日野市立第三幼稚園	日野市立第四幼稚園	